



## 女性学と出会えた幸運(田川建三さんを送る)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊安, 貴美江 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10054">http://hdl.handle.net/10466/10054</a>

## 大阪女子大学の女性学の灯

木村涼子

80年代初頭、わたしが学生だったころ、関西で女性学関係の科目がきちんと開講されていた大学はほとんどありませんでした。わたしが在学していた大学でも、女性教員の数は圧倒的に少なく、女性学関連の科目は皆無でした。在学中は、「婦人問題論」（古くさい言い方ですが、当時はそう呼んでいました）の開講を要求する運動をほそほそとながらやっていました。その大学で現在は「女性学・男性学」などの科目が人気を呼んでいます、わたしの在学中にはそうした科目の開講はとうとう実現しないままでした。

その頃わたしがうらやましく思っていたのは、大阪市立大学と本学、大阪女子大学の二校でした。なぜなら、この二大学は女性論・女性学といった科目を先駆的に開講していたからです。大阪女子大学はそれからずっと女性学の研究と教育の灯を絶やさず、今日では女性学研究センターという形での結実もみえています。これからも、女性学あるいはジェンダー論に関心を持ち、学びたい、研究したい、という人たちはふえつづけることと思います。女性学研究センターは、今後もそうしたニーズに応えていくことができるでしょう。

この度退職されます田川さんはじめ幾人かの先駆者の方々が、大阪女子大学での女性学の発展に尽力されてこられたこと、田川さんとお別れに際してあらためて思い起こし、女性学を志した元「一学生」の気持ちにもどって感謝したいと思います。

## 女性学と出会えた幸運

熊安貴美江

私は1989年度に女性学講座「女性論」の講義に参加し始め、「女性学研究資料室」を経て、現在の「女性学研究センター」としての活動にいたるまで、10年間を田川さんにご一緒させていただきました。

女性学の講座は、「女子大に女性学を」という田川さんの熱い思いから、1982年に本学に開設された授業です。が、自分自身がその講義に関わるよ

うになるまで、実は私にとって女性学はそれほどなじみのあるものではありませんでした。ところが実際に女性学と関わってみると、それまで自分の中で漠然と感じていた女性としての“生きにくさ”の理由が謎解きされるような思いがし、探していたものに出会ったという気がしたものです。と同時に、体育学という自分の専攻分野についても、学生時代には経験しなかった女性学を通しての新しい視点が生まれ、息づくようになりました。スタッフとして講義メンバーに加わることで初めて女性学と出会う機会が得られたわけですが、それは私にとって本当に幸運なことでした。

今や学生への講義のみならず、府民対象の公開講座や、セミナーとセットになった連続講演会、専門的な研究コロキウム、『女性学研究』誌の発行など、研究センターの仕事は幅広く多岐にわたり、それらの表向きの仕事には必ず、事務折衝や講師依頼などの裏方の仕事がついて回ります。また、蔵書の増加に伴う図書目録の作成や、研究センター発足時には図書の移動といった仕事も生じました。田川さんはそのそれぞれの仕事について、表裏にかかわらず労を惜しまずに多大な尽力をされ、本学における女性学発展のための礎を築いてこられました。最近では「大阪女子大で女性学を学びたくて入学した」という学生も現れ、パイオニアとして本学に女性学の土壌を開拓された田川さんのご努力が、いろんなかたちで結実していることを物語っているように感じます。

今後はセンターの専任教員としてお迎えした船橋さんをリーダーとして、女子大に根付いた女性学をさらに魅力的に発展させるため、協力していきたいと思います。田川さんの女性学に対する長年の情熱とご努力に、心からの敬意と謝意を表するとともに、ご退職後も健康でますますご活躍されますよう、お祈りいたします。ありがとうございました。

## 共同作業の意義

萩原弘子

1998年度末をもって田川建三さんは本学を去られた。18年近く前、田川さんが私に、「こんど大阪女子大学で一般教育科目として「女性論」という科目を開講するので、それをいっしょに担ってほしい」と言われたこと